の国，一つ一つの農業についての動向をつかむ方が，より重要な事ではないだろうか。

ロ　農業学習の内容

どういう作物を作り，どういう生産関係の中で，どういう農業問題に当面しているかを理解するため，地域別（国別）に次の点を，おさえようと思っている。

a　農業生産の動向

生産の伸び，国民経済の中での農業，農業人口，農業生産，農業所得と工業の比較

b　農業経営

作物 ― 生産高。生産性。土地 ― 経営規模，土地所有の形態。機械。労働 ― 家族労働，賃労働，農業労働力の流出。

c　独占資本の農業支配

d　農業問題と農業政策

一時限に一つの主題をとりあげ，授業を組みたてる。学習形態は生徒の発表を基にしてすすめてみたい。

（二回生）

〝アマのくらし〟

内田弘子

最近の海外旅行ブームで，香港を訪れる日本人観光客は１日平均２５９人（１９６６年）とかで，秋～冬の観光シーズンは，日本人旅行者あふれるの感さえあります。夜景や，中国料理や，日本より安価な高級欧米商品のショッピングなど，旅行者は香港の幾日かを惜しみなく楽しまれるようです。

さて，香港に，駐在員家族としている私が，興味深く感じている〝女のくらし〟があります。アマ（阿媽）といわれる一群の女性です。言ってみれば〝女中〟ないしは〝下女〟にあたる女性です。彼女達は特徴のある服装 ― １年中ダブダブの中国式ズボンと，白か黒又は黒に近い色の上衣。髪はオカッパのような断髪か腰のあたりまで長い一本の三つ編 ― をしていますので外見上も区別できます。彼女達は一つの社会的階層を作っています。

香港の富豪は革命前に逃れた上海人が多く，彼等が，現在の近代工業の資本家でもあるわけですが，そのような金持ちは，２～５人のアマを使っていて，（料理アマ，洗濯アマ，ベビーアマetc）奥さんは何もしないでせいぜいマージャンという階級もまだかなりあります。家事はアマまかせですので，主婦の仕事の合理化わけても時間の節約につながる事は普及しない傾向さえあります。アマは，いわば住込みの家政婦とも云えます。彼女達の出身は，広東又はその近郊で，ほとんど，か

つての貧農か他の低所得者階層です。アマの中には，結婚しない人も多く，髪の長いのは結婚しないことを示しています。結婚しないことを決心すると人集めをして宣言するのだそうです。昔は，貧しい子沢山の家から貰い育てられ，アマになったり，子供が成長したのでアマをしている老人まで，個人の事情はさまざまですが，香港も，近年，工業が盛んになり，雇用の機会が増えると（就業人口約１５０万）若い人のなり手が少なく，老人化の傾向がみられ，大体４０才以上がアマとして訓練された人達といえます。教育は皆無に等しいので読み書きとくに書く方ができないのが多いので，香港では代書屋はかなりあります。

香港のアマの数は遂に確認できませんでしたが，土地の人によると２０万とも１５万人とも云います。（総人口３７８万，１９６６末）アマの収入は月収２５０～３５０Ｈ.Ｋ.ドル（２万円前後）で，住居と食事が与えられるわけですから，かなり良い収入というべきです。（高校卒Ｂ.Ｇ 初任級３００Ｈ.Ｋ.ドル程度）しかし老後の保証はないので，一人暮しのアマは，グループを作って，フラットを買って老後の収入のあてにしたり，仏教徒のアマは，尼寺（新界にある）に月々貢いで，老後はゆっくり養老してもらうという組織を持っていたりします。親・子供・中には夫まで広東において，一人だけ香港にいるような場合には，１日正月毎に広東入りして金品を持ち帰ります。（文化革命時でも同様でした。）

私の使っているアマは自称４０才。１５人兄弟の６番目。流行病で半分死んだとか，兄弟は広東，香港に半々ずつ。子供のいない未亡人。ポルトガル人の処で１９年洗濯アマをしていた後で私のところへ来たので広東語だけ。字は書けないが一つ家に長くいたのが自慢。広東にいる母親へは時々，中共系の銀行を通して送金します。隣は中国人家庭ですが，二人いるアマの老人の方は，子供の時に買われたアマで，奥さんのお嫁入りの時について来て現在６０才ぐらい。従って親兄弟は全く不明。熱心な仏教徒。今でもほんのお小遣い程度の収入とか，一般に中国人の家には長く居ついて家族と一つ心のアマが多いが，それでも食事は家族のものの残飯を台所で。椅子やソファーには坐らず，髪は洗うが，お風呂には入らず体も毎日ふくだけ。雇用主とアマとの区別は非常にはっきりしたものです。人権すら認められずに使われた昔の姿が少々残っていると思えます。

在住日本人は1,９００人（１９６６年），日本人家庭では，日本語のわかるのが多く使われていますが，駐在員は４～５年で交代するので代るたびに月給を上げたり，退めたり，退めさせたり，民族性の違いから来るトラブルもしばしばです。現在のところは，中流以上の家庭ではアマがいるのが普通ですが，紡績工業をはじめ各種の工業による雇用の増加でこれからは減少すると思われます。彼女達の出身が革命前の中国の貧農層であること，結婚はもちろん食物も不足がちであり，合せて女性の地位が低かった彼等にとって，住居も食物も保証される職業は良かったに違いないので

す。移り行く歴史の側面を見る思いさえいたします。

毎日の生活に，彼女達と接する機会が多いだけで，他のアジアの地域における同種の人達と比較する資料ももたずに，あえて，香港便りの一部にと記しました。

注　数字は，Hong Kong Government Hong Kong 1966 (Report for the Year)

（六回生）

聴講生となって

高橋法子

卒業して4年経った。同級生の活躍は目ざましく，刺激剤にはこと欠かない環境といえよう。だが，仕事にも職場にも一応慣れてきたこの頃がいろんな面での転換期にもなるようで，クラス会にもその種の話題が多くなった。私も「あなたこの頃よく現われますね」と某先生に云われたように，お茶大の研究室に出没し，聴講生として講義室の片すみに腰をおろすことにした。

高校で地理を教えてきて，一年目は神経性胃炎（授業前は胃が痛くなり，終るとケロリ）をわずらったが，今では胃も強くなり，積極的に計画をたてて取り組むところまで落着いた。この「お茶の水地理」が，中学・高校教育現場の教師がぶつかっている問題を提起する場としてわずかでもページをさいてくれたら，素朴だが切実な声が学問研究にも反映されるのではないかと思うのだが‥‥‥‥。

「教えることは教わることなり」とはまことにそうで，教師になってから勉強せざるを得なくなり，教えているうちに面白くなり，学生時代より今の方が読書欲がある。在学中，気がつかなくても平気だった「地理学」についても考えるようになり，多くの疑問と不明な点が出てきた。私の場合，学問する者としてでなく，高校教師としての発想であるが，単に地域的な相違について説明し，世界各地で多種多様な生活，生産様式が展開されているといったところで，それだけでは困るのである。それらの事実はいったいどういう因果関係になっているのかが組み立てられなければ全く事実の暗記で，思考する力とは結びつかない。理論的に解明することができない。地理はその欠陥を克服できないように思った。自分の専攻は地理なのだといいきかせ，それを前提とするが故に地理関係の本を読むことを常としてきたが，それらの本では私がぶつかった悩みを解決してくれないのである。

ところが，一歩外へ出て（自分はそんな気がした），経済や歴史，農業，社会学，地質学，気象学などの専門書を読んで驚いた。地理の本を読むよりずっとよく問題の核心にふれており，迫力があり，面白かったのである。困るではないか。いったい地理とはどういう分野なのか。